

触覚過敏だけは症状を軽減させることができること

☆赤白帽子や給食帽をかぶるのがイヤでイヤで仕方ない子

☆靴下を履くのがイヤでスグに脱いでしまう子

☆文化祭の衣装をなかなか着てくれない子

☆靴の右と左が反対でも気づかずにはき続けてしまう子

…そんな子、先生方も担任をしたことがあると思います（そしてきっとこれからも担任していきますよね）。上の四角で囲われたこれらの行動はいわゆる「感覚過敏（図1）」の中の特に「触覚」の過敏（鈍麻）に原因のある行動です。この「感覚過敏」ですが、ICD-11においてつい5年ほど前に自閉症の特徴として記載されたことはNo自閉症のタイトルでお伝えをしています。そしてこの「感覚過敏」は、原因が脳の機能障害なので、基本的には脳が治らない限りは、感覚過敏も「治らない」ものです。しかし、「触覚」の過敏だけは脳へのアプローチではなく、からだへのアプローチ（正確には深層筋へのアプローチ）によって軽減させることができる（「治る」ではない）と、感覚統合の分野で報告されています。今回はそれについてお伝えします。

少しだけ復習ですが、御存知の通りASD児は、障害特性が原因となって他者への興味・関心をもつことが苦手ですよね（例えば相手がどう思っているかとか、相手の気持ちがどう動くかの予測とか）。更に感覚過敏（猛烈に1つの感覚に身体が反応して時に意識をハイジャックされること）や感覚鈍麻（普通なら感じ取れるはずのことが感じ取れないこと）があるために、学習やコミュニケーションの成立に欠かせない「三項関係」が成立しにくかったです。（図2）

ここで特に「触覚」の過敏に着目するのですが、健常発達の子どもは初期発達において触覚を使って「たくさん触れあう」ことで、以下の教育的効果を得ています。

- ☆ アタッチメント、ラボート形成（愛着形成や信頼関係形成）
- ☆ ことばの獲得以前においての共感コミュニケーションの土台作りの役割
- ☆ 外界への働きかけのファーストステップ

そして、触覚に過敏（鈍麻）をもつASD児は、「抱っこがイヤ」とか「おもちゃの冷たさがイヤ」とか触覚上の問題でこの初期発達段階の教育効果の獲得にまずつまずいているので、その後のコミュニケーションの獲得にも課題が出てきます。

さて、いよいよ本題で「触覚由来の過敏はどうすれば軽減していくか」についてです。『触覚過敏』は「触る（られる）という刺激に対してからだが過剰に反応してしまうこと」ですが、これを運動学的に表現すると『『触る』ことで入力した感覚に、表層筋が制御不能反応をしてしまうこと（図4）』となります。さらに何故「表層筋の制御不能」が起こるのか？を掘り下げていくと、深層筋が未発達さがあると、本来深層筋が処理・吸収すべき『触覚』由来の刺激までを、表層筋が請け負って処理しようとする為に処理限界を超えて『制御不能』状態になるという仕組みです。

深層筋を鍛えると、触覚由来の刺激を表層筋と深層筋とが協力しながら処理していく（図4の状態から図3の状態にしていく）ことが上手になります。こういう理由で本来脳に原因をのある触覚過敏に、筋肉の面から改善を試みることができます。



図1_感覚過敏のイメージ

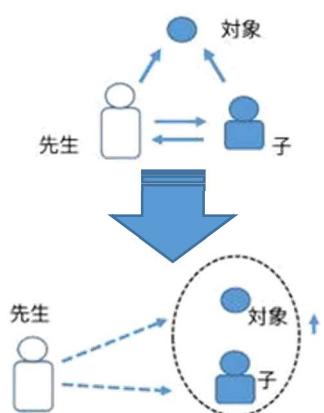


図2_ASD児の3項関係の成立しにくさ



図3_通常の表層筋と深層筋の関係



図4_制御不能の表層筋